

## 大学放浪記 (54)

伊藤信孝

マエジヨ大学客員教授・国際学部

本報では「研究論文」について記述する。周知のように論文は研究者、学術関係の仕事の主たる仕事として生きていく大学の教員、企業のエンジニア、或いは公的、私的学術研究機関で仕事をしていく人にとっては将来を左右する、大きな生命線である。特に大学の教員として身を立てるには学位を保有していないと応募資格すらなく、極めて難しい。しかも和文でなく英文でそれなりの基準をクリアして掲載された論文がいくつあるかと言う、まずは総編数が評価の対象になる。ここで言う基準とは、投稿した論文に関する専門家、あるいはその道の権威、またはそれに極めて近い専門家として選ばれた複数の読者(一般に2人)の評価に耐えた論文のみが掲載されるから。この行程を有しない学会が刊行する学術誌は評価も低い。何故国際学術誌かと言うと、それは世の中が国際化に向かって動いているからであり、大学が将来的にも生き残る為には2つの条件をクリアしなければならない。その2つとは「国際大学 International university, Internationalization」であること、他の1つは「研究大学 Research university」であること、の2つである。言うまでも無く大学の使命、役割は教育、研究を通じて次世代を担う社会人を育成することである。いわゆる「人を作る」のが大学の使命である。しかしどのような人材を作り、社会に輩出するかはそれぞれの大学のリーダーの指導力、方針、戦略、政策などに委ねられている。もちろん行政からの指導もある。例えば大学の独立行政法人化などがその例である。研究論文は大学教員が昇格(の場合で有り殆どが昇給の場合は殆ど無い)するときに必要なものであるから研究者個人のものであると考えられるものであるが、研究者自身があまり自由奔放に、勝手な研究ばかりしては大学が目指す方向が分からなくなる。研究者自身の立身出世も必要であるが大学の一員として、その大学がどのような分野でリードし、社会的に貢献しているかという部分も重要である。企業では利益を追求するという共通の目的があるので、結束しやすく、その目的に反するような姿勢や挙動は社会的にどうかと言うことで抑制される。基本的に民間企業では協力して仕事をして共通の利益を求める協調性、仕事を遂行するに十分な能力が求められ、反社会的な行為や企業イメージを落とす行動は利潤の追求の上でマイナスに働くので抑制、配置換えなどで戒められる。言うまでもなく不法行為であれば企業であろうとその他の機関であろうと平等に罰を受けるのは言うまでもない。企業では研究テーマも制約を受けるが大学は極めて自由である。それだけに大学が一つの目標に向かって進むべき方向を決めることは極めて難しい。学問の自由と言う大義がこの状況を変えにくくしている。大学教員にとって論文のみが唯一のものと考え、大学自身の発展にほとんど興味を持たない教員が多いのもこうした背景があるからである。論文や学会、ワークショップの開催となると「俺が専門家だ」と言わんばかりに専門家ぶって強引なまでに偉い人に近づき、一応コミッテイの

組織の必要性を強調するが、実際はその本人がすべての情報を保持、握ってシェア、公開しようとしていない。論文を何篇書いたとか、こうした国際学術誌に掲載されたと言って自慢げに言うが、腹の裏には自らの利益が優先している。上の人には媚を売り、大学の振興にかかわる大型予算プロジェクトなどにはあまりにも興味も関心も示さない姿勢がその意図を表示している。将来的にはそうした彼ら一部の人間に大学が乗っ取られるのではないか、などと危惧する人もいるが、業績(名の通った国際学術誌に掲載された論文数)もなく、むしろ逆に共著で名を連ねている逆の立場では反対のしようがない。前途多難であることは目に見えている。大多数の大学の教員の論文数が足りなくて、研究予算申請プロジェクトに添付するだけの数の論文がないのもごくあたりまえの如きである。やはり大学人としてのプライド、属する大学の尊厳、社会貢献などに対しあまりにも認識が異なると上記のような大学ができてきても不思議ではない。そして自分の関心のあること以外には無気力、無関心であるから何時までたっても大学は良くなる。先生が変われば大学は良くなるという人もいるが、そうはいかない。なぜなら、そうした利己的な教員から受けた教育からは、同じような人間しか生まれえないからである。ここに教育の重要性があることに気付くべきである。

ところで、研究論文は以下の3つの観点から評価される。

- 1) オリジナリティ(研究の独創性)、2) 科学的観点からの考察、3) 実用化への可能性、がそれである。同じ研究者でも長年の研究生活から論文に対する考え方や見方が変化する。後期高齢者になった今、筆者がどの様に論文を見ているかについて披露しておく。ちなみにタイの大学をいくつも渡り歩いてきた筆者にとって、雇用側の大学によっていくらかその雇用基準に差があることは当然であるが、厳しい大学の例では、論文の総数もさることながら、特に最近5年間で3編、しかもISSN、DOI認証を有する学術誌であることと言う条件が付く。加齢と共に上記3つの評価基準をクリアする論文を書くことは段々難しく成ってくる。それでも年に1編ぐらいは何とか書くようにと頑張っているが、論文作成以外の部分で時間を費やすのが苦痛である。それは論文投稿に於いて殆どの投稿がオンラインでの投稿を規定し、指定のフォーマットに入れ込むことである。コンマやスペースなどが適切でないと言う指摘に従い、しかも視力も低くなった年齢で対応するのは苦痛以外の何物でも無い。しかし文句を言っても条件を満たさねば雇用されないとすれば何としても乗り切る必要がある。最近ではコロナ禍で現地に出向き学会やシンポジウムに直接参加できないので予めビデオでプレゼン資料を作成して送付する必要がある。それやこれやで昔とはかなり事態が異なる。でも愚痴を言っても事態は変わらないから受け入れるしかない。知人やかつての留学生にも大変お世話になっている。現役時代は若いし、自分に対しても厳しく余程のことが無い限り譲歩や妥協をすることがなかったが、流石に年を取るとなかなかそうはいかない。定年退職後もタイの大学に招聘され、さらに働く場所と機会を得られたことに大変感謝している。そうした状況のなかで、謝意の表し方のひとつが、自分が持てるものを使って教育、研究で報いることと認識し、タイの関係学会での学術活動をコンスタントに継続して来た。タイの文化のひとつに年長者を敬う

(Seniority) と言うのがある。何処の国にも同じような文化はあるが、タイはよりこの文化が強い。そんなこともあって関係学会で発表してベスト・プレゼン賞や論文賞も頂いた。多分にこうした配慮がイベント主催者側に働いていたのではないかと勝手に推察している。しかしその様な対応に甘えて本来の力を節約するなどと言った対応をしたことは一度としてない。折角頂いた機会だから、精一杯対応したいと考えてやってきたつもりである。その様な姿勢を継続してやってきた報いもあってか、いろいろな学術関係機関や出版社からも論文投稿について多くの誘いを得るようになってきた。しかしそうした機関からの招待も必ずしも無料ではない。何某かの費用の支払いが求められる。もちろん普通の学会でも参加して論文発表をする場合は登録料の支払いが求められる。一般には 200 から 300USDほどと思われる。それでも学生、院生にとっては負担が難しい。何とか 100ドル以下でと言う要望も至極当然である。しかし大きな、或いは所帯の大きい学会では登録料も高く、招聘講演、基調講演など招聘という文字が付いていても、無料ではなく、むしろ参加、招聘講演者であっても、その身分 (Status) に応じて登録料が決まっている。教授クラスでは 600 から 700ドルという学会もある。この場合、登録料は参加以外に、優秀な論文であれば閲読過程を経て、しかるべく学術誌に掲載できる。学会開催時の内容と同じではなく、さらに内容的に追加 (Extend) した形で閲読をクリアし掲載される手続きになっている。学会発表時に、プロシーディングに掲載された論文に30~40%を追加した上で閲読を受ける。そのチェックポイントをクリアすると公刊、掲載となる。したがって招待講演と言っても、これまでのように交通費や参加費、食費、などに加えて謝金も含めた全てを招聘者側が負担するという形とは完全に異なっている。現職時には研究発表、論文発表においては一生懸命やってきた。学会での口頭発表は、1演題わずか 15分ほどであるので、もう少し話をしないと理解して貰えないという場合は大変困ったものである。しかし幸いなことに当時筆者が属していた学会では口頭発表の演題数に制限はなく、いくつ発表しても良かった。そうした背景もあって、ひとつの演題で 4編、総時間で 1時間発表したこともある。若気の至りというか、怖い物知らずというか、当時は是非「俺の言う事を聞いてくれ、聴いて欲しい」という一途の気持ちであった。その時の司会者は「しょうも無い発表に、こんなにも時間を使って！」と言われたのを今でも記憶している。しかし、その発表を終えた後、「非常に良かった」と聴講者の一人が筆者の所に来られてお褒めの言葉を頂いたことも記憶している。もっと驚くべき話をすると、当時は 7編ほど同じ学会で発表したこともある。当時、動画に興味を持っていた筆者は口頭発表では必ず 8ミリで撮影した短い動画を証拠 (Evidence) として使ってきた。目的は説得力があるからその手法を徹底した訳である。しかし発表はしても論文を書かなければ駄目だと関節的に御指導頂いた恩師に強く言われていたので常にその言葉を心に秘めて生きてきた。太平洋戦争(第 2 次世界大戦)が終わって日本が食糧不足に陥り、食料増産が急務となった。また農業が極めて厳しい職業で有り、田植え、除草、収穫の 3 作業は農家にとって「何とか成らないか」と言う思いであったのを鮮明に記憶している。圃場の耕耘はもっぱら牛でおこない畜力

と人力の時代であった。代掻き作業も牛が主流であった。しばらくして農業機械化への気運が高まり行政も稲作に注力して機械化推進に舵を切った。そして新しく2つの大学に農業機械学科が創設された。そのひとつの大学は筆者の母校でも有り、自らの専門が農業機械であったことも有り、大学教員として採用された事を感謝し嬉しかった。既存の学科が解体されて新しい学科が創設されたが、それまでに全く母体が無かったわけではない。筆者の学生時代の専攻は営農工学（現在は農業工学と言う。英語では **Agricultural Engineering** で変わりは無い）でその中に農業機械分野があった。改組、創設とも成れば教員の数と質を基準にあうレベルで準備する必要がある。当時の基準では1学科は4講座で成り立ち、1講座は教授、助教授、助手の3ポストで成る。教員数は学科全体で12名であった。そうそうたる人材が集まり一時は農業機械のメッカとまで言った人も居ると聞いた。幸にして母校に採用頂いた事に感謝して、頑張ることを決意した。

まさに若気の至りと言うか、怖い物知らずというか、「何とか、大学、学科が良くなるにはどうしたら良いか」と考えた。そこで考えた結果、出した結論は学会誌に毎号研究論文を含む記事を掲載すると言う目標であった。年長者の中には「青くさい若造が、何と言うたわけたことを言うのか」と冷めた認識であったと推察するが、筆者自身が公言している訳でないのでわざわざ説明する必要は無いので沈黙を保ってきた。当時学会誌は年に4回 (**Quarterly**) 刊行されていたが、学会での学科の活動はいささか当時の筆者には不満であった。そこで「よし年に4編(学会誌に毎号1編)の記事を載せる」ことを決意した。その後学会誌は年に6回刊行される事になったのでそれも射程に入れて対応した。結果としてその目標は両方とも達成したが、そのうち「ちょっと待て、自分が書いたものがどれほど世の中に役立っているのか?」という疑問が湧き、しばし時間を取って考えることにした。そう考えた結果、次の結論に達した。すなわち、数ある教員、研究者の居る中で、その中から頭をもたげるにはそれなりの差が無いと評価されない。ライバルの教員や研究者も頑張っているのであるから、その差は大きくはない。そのわずかな差を作るのにどれだけ努力しなければならぬのかを再認識した。その後はかなり真剣に「未だ、未だ・・・」と自制しながら本当にオリジナルであるかを確認できる迄は発表しない、と考えて来た。もちろん、オリジナルなアイデアである場合を考慮して、アイデアが浮かんだ時に知的所有権の守りも忘れなかった。当時の同僚が話してくれた研究テーマについての話を紹介しておく。若い間はひとつのテーマでなく4つほど異なるテーマを持ち同時併行で進めるのが良い、と聞いた。この話の裏には世の中はダイナミック (**dynamic**) に動いているので、他の分野についても目を配り社会に遅れない様と言う意味も入っているかと認識して居る。学祭的教育 (**Interdisciplinary education**) が重視されているが、この話とも大いに関係がある。

そこで話は最初の方に戻るが若い時には決められた規則や自らの信条に厳しく、妥協や譲歩を許さない姿勢を貫く事は重要であり、その教員の背を見て学ぶ学生に取っても良きモデルを示す必要がある。しかし加齢と共にその勢いは衰え、書籍の出版社や学会からの依頼としてやって

くる大半は金儲けのビジネスである。既に学会からベスト・プレゼン賞や論文賞を貰っている論文を再度これから出版する書籍の章に入れたいからと言う誘いである。結論から言うと筆者は高価でなければ誘いを受けても良いと言うのが現在のスタンスである。より広く自分の考えを知って貰う機会を提供することができればと言う思いである。いまさら賞を貰うほどの栄誉も要らないし、高齢者にとって果たすべき役割は「後続く若者を励ます」ことであると認識している。若い時はそれなりの厳しさに打ち勝つ気力、またそれに基づく努力が必要であるが、年を取ればそこまでして名誉や金儲けをする必要は無いと考えて居る。こちらからカネを出して掲載出版依頼をすることは流石にしないが、要請があればと言う場合と、プロジェクト申請などに於ける説明としての証拠(Evidence) 資料とする場合に限定している。大学の教員やそれに類する人にとって論文は重要であるが、こと大学において研究論文以外は評価に値せず、論文数が少ない他者を別視する教員を見かけるがそうした教員が大学の誇り(Pride) や尊厳(Dignity) を低下させていることを認識していないようである。したがって学生対象の国際交流事業、特に学術論文発表を主体とするプログラムでは論文発表のみがそのプログラムの唯一の重要事項で有り、それ以外は全く関心を示さない教員がいることも事実である。そうした人が振る舞う姿勢は、上記に既述したが、自分が何時も中心で有り、コミッテイを作れと言っても、姿勢は見せるがジェスチャに近い。情報を記事せず、いつまでも占有し、開催の時期が近づき、これ以上は付置できない時になってやっと情報のシェアとなる。関係する近隣の大学にもどの様に説明しているのか誰も知らない。あたかも自分が面倒を見ている研究室の学生に、より多くの機会を用意する姿勢に見えてならない。常々筆者はこの種のプログラムは論文発表のみではなく、国際化を学ぶ機会であることを彼らは理解して居ない。だかあ協調性もないし、自分の発表が済むとそそくさと引きこもる。社交性も国際感覚も、エチケットもマナーもない。プログラムの主旨に対する予備知識を持ち合わせて居ない。それでも、参加した、成功だったと自らを勝手に高く評価している。評価は他人がするという事も知らないようである。すなわち論文のみが最重要であり、学生に対する教育という観点が抜けているからである。本シリーズで何度も書いているが、そのプログラムについて予備知識も持たず、工夫もなく、なにをやるかと言う強い意志もなく、ただこれまでの様に、まねごとに近い形で閉会式を迎えればそれで「成功」という、「井の中の蛙」的レベルに何の疑問も挟まない低いレベルもある。ホスト役がローテーションであろうと無かろうとホストならホストとしてその役割を十分に果たするのが普通である。それができないならその座から自ら外れるべきである。やりたいと意志表示を下からそれならと認可すると、その後一向に活動もせず、自らの勝手な判断みで勝手に黙り込んでいる。いつまで沈黙を保つのか、何時公式アナウンスをするのか、他の共催協力大学のことも考えず、ひたすら沈黙を保っている。こう言う大学もあることをここでは参考の為に記しておく。

#### <追記>

2023年より再生可能エネルギー学部から国際学部に移ることになった。理由は簡単である。当

初の雇用では適当な予算がなく、その時既に進行中の「プロジェクトの予算でまかなって貰うよ  
ちであった。2回ほど身分も変わり、その機関にあわせてワークパーミットやビザ延長のひつよう  
があった、幸にもその形で雇用頂いたが、今回は大学がその身分を **Foreign Expert** としての雇  
用となり、所属は国際学部となった。本来この関係の仕事を希望していたが、かなわずやと本  
格的に仕事ができるのではと期待している。